

開講日	2015年春期 火曜日 18:30-20:00※	講義場所	研究棟11階講義室A	定員	60名程度
コースディレクター	名古屋市立大学大学院医学研究科 分子毒性学 教授 酒々井 眞澄				

※5/26(火)の講義のみ、19:00-20:30の講義時間となります。

科目概要 および 期待される 成果	【概要】日本国民の半数は一生に一度はがん罹患し、その3分の1は死亡する時代です。がんの生物学的な特性を明らかにすることは極めて重要です。なぜならその情報をがんの正確な診断、効果的な治療あるいは予防に結びつけることができるからです。この講義シリーズではがんを相手に戦うために必須な情報について、これまでにわかったこと(基礎研究領域)、がんをつきとめる(臨床診断領域)、がんを抑えこむ(臨床治療領域)について専門家がわかりやすく解説します。このシリーズには日常生活での注意点や臨床現場で役立つ実践的な内容が含まれます。また、コスト面で効率的にがん医療をすすめるための方策(医療経済)、福島原発事故に関連した放射線ばく露(放射線がん)、くすりをどのようにして作りあげるか(創薬)などのup to dateな講義も盛り込みました。受講生のみなさんにはこの機会に是非、がんを知ってがんをコントロールする戦略について学んでいただきたい。 【期待される成果】本シリーズの受講生がめざす学習目標は、(1)がんの生物学的特性と予防の方策について理論的に説明できる、(2)がんの診断および治療について最新医療を含めて説明できる、(3)医療経済・放射線がん・創薬について概説できる。				
目標とする 資格	医師、薬剤師、看護師、放射線技師、臨床検査技師、行政職、教員、医療関係職など				

サブカテゴリ	No	タイトル	講義概要	開講日	講師(所属)
L-1	1	暴走する遺伝子	がんは、“生命の設計図”ともいえる遺伝子の異常によって起こります。どうしてそのような大切な仕組みがおかしくなるのでしょうか？ 遺伝子の制御異常の原因について解説すると共に、がんの診断・治療への応用についてお話しします。	4月14日	教授 近藤 豊 名古屋市立大学大学院医学研究科 遺伝子制御学
L-2	2	臓器がん研究の最前線	臓器がんは罹患数と死亡数がほぼ同数である予後不良な難治がんです。革新的な診断治療方法の開発には臓器がんの特性についての理解が必要です。本講義では、近年行われている研究について紹介します。	4月21日	講師 深町 勝巳 名古屋市立大学大学院医学研究科 分子毒性学
L-3	3	がんの画像診断	がんの発見、診断において画像診断は重要な役割を担っています。本講義ではCT、MRI、FDG-PET等について、それぞれの特徴とその画像診断の方法を概説します。	4月28日	講師 小澤 良之 名古屋市立大学大学院医学研究科 放射線医学
L-4	4	がんの病理診断	皆さんが病気になるってしまった場合に内科、外科などの医師に診てもらおうと思いますが、その際には採血やCT検査などを行って病気の診断を行っています。これを「臨床診断」と言います。それに対して胃カメラや手術などで採取した病変を標本にして顕微鏡で行う診断が「病理診断」です。「病理診断」は「確定診断」とも呼ばれ、この診断に基づいて治療が進められて行きます。今回の講演では医療現場における「病理診断」の重要性についてお話いたします。	5月12日	教授 高橋 智 名古屋市立大学大学院医学研究科 実験病態病理学
L-5	5	臓器がんの外科治療と核酸医薬を用いた治療への挑戦	臓器がんに対する外科治療は最も有効な治療法です。しかし根治切除例であっても5年生存率は約10%、切除不能例では1%未満と極めて悪く、新規治療法が必要とされています。講義ではがんに対する核酸医薬の開発の現状を解説します。	5月19日	講師 國科 俊男 名古屋大学大学院医学系研究科 腫瘍外科学
L-6 (開始時間19時)	6	どんどん進歩する薬物療法	「抗がん剤だけはやめなさい」という本がでるくらい、一部で嫌われ者のがん薬物療法ですが、分子標的治療薬の登場により、その認識はどんどん変わろうとしています。その進歩を学びます。	5月26日	教授 佐治 重衡 福島県立医科大学大学院医学研究科 腫瘍内科学
L-7	7	消化管がんの外科治療(がんを封じ込める最新手法)	消化管がんのうち胃がん・大腸がんは日本で最も多いがんであり、死亡数も2番目・3番目に多いがんです。この2つのがんの外科治療について、診断・治療計画・治療法を中心に相違点も含めて解説します。	6月2日	助教 坪井 謙 名古屋市立大学大学院医学研究科 消化器外科学
L-8	8	がん患者における緩和医療薬学の実践	がん患者の外來化学療法導入から終末期までを継続的に支える緩和医療薬学について、症例を提示しながら解説します。さらに、がん患者のエイジング・イン・プレイスについても考えていきたいです。	6月9日	特任准教授 川出 義浩 名古屋市立大学大学院薬学研究科 病院薬剤学
L-9	9	がんの転移のすべて	本講ではがんの転移が、なぜ忘れた頃に特定の臓器に発生するのか？ なぜ治療抵抗性を獲得するのか？ どのように対処すればよいのか？ について、骨転移を例にあげて解説します。	6月16日	准教授 二口 充 名古屋市立大学大学院医学研究科 分子毒性学
L-10	10	放射線の健康影響を正しく理解する	福島原発事故後、放射線への不安が高まっています。放射線についての基礎知識と健康への影響について解説し、放射線を利用する医療の現場が、正しく理解できるようにします。	6月23日	チームリーダー 柿沼 志津子 独立行政法人放射線医学総合研究所 放射線防護センター
L-11	11	肝がん撲滅への挑戦	肝臓がんの超高危度危険群である慢性肝疾患患者に積極的に介入し、発がん・再発を抑制できれば、これらの患者の予後は大幅に改善します。本講では、肝がん撲滅に向けた究極的な取り組みである、肝臓がん予防を中心に講義します。	6月30日	教授 清水 雅仁 岐阜大学大学院医学系研究科 腫瘍抑制学講座 消化器病態学分野
L-12	12	エビデンスにもとづくがんの予防	日本人の2人に1人が一生に一度はがんを経験し、一年間に80万人の人が新たにがん罹患と報告されています。社会の超高齢化に伴い、この数値は今後もさらに増加することが想定されます。この流れにブレーキをかけ、がんにかかる率・死亡率を減らすためにも、がんの原因の解明と予防法の開発が急務です。本講義では、これまでの研究成果に基づいた、個々人に最適な予防法について解説します。	7月7日	研究所長 中釜 斉 国立がん研究センター
L-13	13	個人に合った抗がん剤の選択(遺伝子多型とPK/PD)	抗がん剤の効き目を左右する因子にはどのようなものがあり、安全かつ効果的に使用するためにはどのように用いられるべきかを理解し、患者個人に合ったより良い抗がん剤の使い方を学びます。	7月14日	准教授 中村 克徳 名古屋市立大学大学院薬学研究科 臨床薬学
L-14	14	くすりと医療経済	医薬品の適正使用推進は、医療安全のみならず、有害事象減少による患者QOLの改善や入院期間の短縮、治療効果の向上などが期待されています。本講義では、がん治療における医薬品適正使用例を挙げ、医療経済的観点から解説します。	7月21日	副薬剤部長 鈴木 昭夫 岐阜大学医学部付属病院 薬剤部
L-15	15	くすりの創製	現代の創薬には化合物ライブラリの選択、初期リード化合物スクリーニング、構造活性相関解析、動物試験、臨床試験のステップがあります。成功率は1万分の1であり、企業にとっては極めてリスクな挑戦といえるでしょう。講義では創薬手順(アイデアから具現化)と成功例、医療への波及効果について解説します。	7月28日	教授 酒々井 眞澄 名古屋市立大学大学院医学研究科 分子毒性学

S: シミュレーション形式 L: 講義形式